

を協議した。具体策は官民合同協調して実施することになる。カツオ・マグロ漁業はいよいよ急速に苦しくなり、1965年9月借入資金、対韓漁船輸出等があった。企業体質を改善して連鎖倒産を防ぐため、「カツオマグロ漁業合理化作業団」の構想が出た。一方資源解析を進めたところ、一部魚種を除き総漁獲量限界点に達したものが多く再生産も追いつかぬ状態で、資源の見通しのできるまで漁獲努力を抑えるほかない。諸外国も進出して漁場開発も限度に達しており、漁獲管理が各洋で問題になつて、日本がイニシアチブをとつてリードすることが大せつである。経営面の悪化（自己資本比率低下等）、を立て直し経営を安定させて、国際競争力を強化さすべきである。緊急的金融面対策を要する。単位漁獲低下は少くとも現状程度にとどめるようにすることである。労働の機械化省力合理化により生産力を高めねばならない。事業合理化でコスト引下げ、計画し、自己資本蓄積を妨げる経営管理、漁業規模の拡大、漁業法制約の打開を考えねばならない。資源保護等も考え、輸出生産販売の合理化が必要である。また労働力の質、量とも改善せねばならない。労賃のウエイトの問題もある。採算性を向上し労働条件をよくし雇いを安定化、漁船輸出対策、マグロ類輸入対策、合併事業対策、国際競争対策強化をはかるなどである。5年後の目標（生産規模、生産費）を策定し、毎年の実施計画をきめ、低利資金供給、法人化、規模拡大、輸出振興、企業の合併拡大、企業資金、現物出資など……。推進母体は業種、魚種別に進める。現在3000トン（300人）を規模拡大して2000トン以下なら何人でもよいとする。行政を積極的に脱皮せしめ、許可行政から産業政策へ転換させる大きな変革期である。中小業の為に調査講習もある。大水に特別委員会をつくつてやる（水産庁も一しよになつて）。これを相手に本格的に折衝する。当初制度化に疑問をもち、要綱程度でよいといっていたが、何回か会議後に予算問題にいきり、政府も中小漁業法制化をさし当り、カツオマグロ、以西にしほつてやるもようである。大蔵省、国会の難関をこえ、実現には政府も意欲的であるが、業界の自主的努力が乏しい。関係業界は近代化計画を立案、提出の力を注ぎ、水産庁は更に検討して、42年度予算要求とならう。

3 オーストラリア東海域マグロ漁場と漁況

船越 福松（極洋捕鯨株式会社）

ニュージラント漁場に昭和35、37、39、41年出漁、沖縄船で Fiji 基地 10° ~ 13° S、 150° ~ 170° E

ピンナガ、キハダ漁。クロマグロをタスマニア近海4月ごろ以降1日当2.5~3トン漁した。豪州ブリスベイン沖でメカジキ縄、メバチが半々ぐらいとれ、値もよく、肉質がよかつた。7月頃 34° ~ 37° Sシドニー沖に集中し、1日4~5トンのクロマグロ漁した。タスマニア沖はシケ多く、漁がなくなつた。ニューカレドニア西漁場（4~5日走り）は2~3トン/日に減少、シケが続いて2トン/日に落ち、沖縄船員でシケに弱いのもどつた。一般漁船もやつていたが余り好くなかつた。ニュージラント漁場の方も8月ごろ2~2.5トン/日になり、シドニー沖から移動した船もある。そしてニューギネア真南のキハダ漁に移つた。3~4月もとのタスマニア近海の漁にもどつた。11月ごろから現在ニューギネア南沖で漁している。東豪州沖11月~3月

月全然操業しなかったが、今の状態では周年操業しなかつた漁のないのにシケを粘つてやる。魚価がよくないので適当な漁場もないので、インフレ傾向が今の救いになつてゐる。シケ多いため毎年1~2名波でさらわれ死ぬ人がある。300鉢で昭和35年初めて行つて、置いたものを取るよつに7~8トン/日も漁獲した。同37年400鉢で6~7トン/日も漁れた。同39年には漁獲低下し3トン前後(時には漁れたが)。こんなに魚が居なくなつたかと認識を新たにした。沖縄船では枝縄13~15ヒロを10ヒロにちぢめてやつた。

漁場開拓当時焼津船で1隻図抜けて好漁する船があつたので、わざと縄を交錯させてみたところ枝縄が8ヒロだつたことがある。

タスマニヤ沖の盛漁期は4~5月、シドニイ沖では7~8月で、8月頃はシオ(北流)速くて縄が切れる。一昼夜に60マイルも流される(2.5ノット)。9月シオ弱くなり縄は切れぬが、魚も分散する。160°E東方水域に漁がある。8月24°~28°S、154°~156°Eの細長い狭水帯にメカジキ漁場、昭和39年8~10トンの漁あり、昭和41年も4~5トン漁つた。新月前で1トン足らずの漁、満月前後は大へん好くとれた。メカジキ、メカジキが主で、トンボマグロが混り、肉質良く、kg当り500円もした。餌はサンマよりイカの方が大へん喰ひが良好であつた。夕方縄を入れて夜中に揚げ出し昼終る。南に向うシオ速いため、シオ上り出来ぬときは、縄を南に入れて縄廻りして南へと揚げた。昭和41年はニューカレドニヤ方面で2~2.5トン/日、フィジー南方(27°S~)で3.5トン/日平均、西に移つてしだいに漁がなくなった。

豪州東水域8~9月メカジキ15.5°~20°C、クロマグロ19°Cぐらいの水温でとれ、大型60kg以上、中型は40kg前後、小型は20kg前後、極小は20kg以下、シドニイ沖38°~34°S、岸に近いほど小型になる。タスマン海には7月から出航したが、7月末には漁が落ちた。メカ縄浮き10kgで、メバチよく罹り、30~40尾釣れば好漁、魚体も大きい。

4 ミナミマグロの漁況について

磯部 和男(神奈川県水産試験場)

1) 序文

近年ミナミマグロを対象とした漁場はオーストラリアの南の南緯50度付近の海域にまで拡大された。そこで拡大された海域を含めて1966年までのミナミマグロの漁況についてとりまとめたので報告する。調査海域は図1に示すA~Gの7海区である。

資料は神奈川県水産試験場から出している鮪漁況速報および全国鮪研究協議会刊行の雑誌、鮪漁業である。

2) 釣獲率の季節変化の平年型

A, B, C 3海区のミナミマグロの釣獲率季節変化は図2に示す。

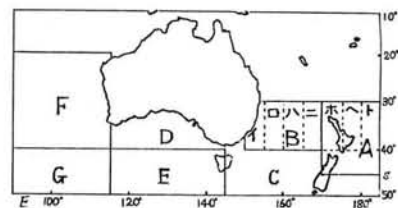


図1 海区図。